

グローバルゼーション、移動／定住に関する記述課題

白石壮一郎

1. 経緯

本特集は、2010年11月6日（土）～7日（日）に名古屋大学で開催された日本社会学会第83回大会においてもたれたテーマ部会「グローバルゼーションと移動／定住のフロンティアの現在」での討議の記録である。日本社会学会は、今年より若手研究者によって企画・運営される若手企画テーマ部会を設け、同大会では本部会をふくめ4つの部会がもたれている。4つのテーマ部会全体の企画については、学会に選出された若手フォーラムメンバー8名で開催半年前の時点から話し合い、川端と白石がこの部会の企画・運営にあたることとなった。フォーラムメンバーのみなさんと、フォーラムでお世話になった浜日出夫（慶應義塾大学）、船橋晴俊（法政大学）、飯島祐介（東海大学）の各先生方には、この場を借りて御礼申し上げたい。

また、本研究科大学院 GP のもとでは、院生・研究員が中心となってふたつの共同研究「東アジアのストリーートの現在」（代表 稲津秀樹、谷村要）、「〈承認〉の社会学的再構築」（代表 吹上裕樹、平田誠一郎）が実施されており、これまで約2年間に合計19回の公開研究会を開催してきた。この部会は、テーマとしても登壇者の人選としても、これらの共同研究班がこれまでに開いた研究会の議論、および議論をともにしてきた方々に強く関連したものであり、その意味ではこれらの共同研究の成果発表の一環でもあった。

開催当日のこのテーマ部会の進行は、以下の通りである。

○イントロダクション

白石 壮一郎（関西学院大学）

○報告1 「野宿者の移動と定住」

山北 輝裕（日本大学）

○報告2 「イギリスの若者ムスリムの社会意識—グローバルゼーション、再帰性、アイデンティティー」

安達 智史（日本学術振興会／東北大学）

○報告3

「移動する人びとの社会をどのように〈フィールドワーク〉できるのか—〈自己延長的なフィールドワーク〉の試みにむけて—」

稲津 秀樹（関西学院大学／日本学術振興会）

○報告4

「ネットコミュニティと地域コミュニティが交差する〈場〉—滋賀県犬上郡豊郷町におけるアニメ聖地を事例として—」

谷村 要 (大手前大学)

○報告5

「グローバリゼーションと地元志向」

轡田 竜蔵 (吉備国際大学)

○コメント1

塩原 良和 (慶應義塾大学)

○コメント2

五十嵐 泰正 (筑波大学)

○リプライ

山北 輝裕、安達 智史、稲津 秀樹、谷村 要、轡田 竜蔵

○総括

川端 浩平 (関西学院大学)

2. 導入

「近代化」は、人文社会科学の最大の記述課題でありつづけているが、ここ20-30年のあいだでいわゆる「近代化論」は退潮し、そのあらたなヴァリエーションとも言える「グローバリゼーション論」が台頭して来た。現実社会でも、1999年シアトルでのWTO開催に抵抗した直接行動以後、アンチ・グローバリゼーションの社会運動も世界各地で注目されるようになった。「かつてないほどヒト、モノ、情報の流動性が高まり、従来のさまざまな社会的境界が融解・断片化し、地球規模の 이슈が浮上する」。どの社会学の教科書をもても、「グローバリゼーション」といえばこれに類する定義がみられる。

こうした「グローバリゼーション」と人びとの移動、それにともなう帰属、identityの変容といった主題に関しては、社会学ではすでにひととおり言及されつくされた感がある。つまり、まず古典的な見方として、社会の流動性が上昇し、均質化・標準化がいつそう押し進められる、という見方がある。それに対して、じつはグローバリゼーションのなかには、人びとの滞留や差異化もすすめられるというローカル化ないし再ローカル化の契機もはらまれている、と言われる。そしてさらに、その再ローカル化は必ずしも「下からの」グローバリゼーションへの対抗というものばかりではなくて、資本の商品マーケティングや行政の町づくりのために差異化された文化的資源をもってローカル性が演出され、あるいはうわべの「多文化的状況」が演出されており、人々はそれを消費しているにすぎず、そうした現象はより背後にひかえている構造的な社会問題を隠蔽している (cosmetic multiculturalism) との指摘も、すでになされてきたものである。

グローバリゼーションを記述するにあたっては、社会学ではこうした、どちらかといえば批判的な内容の言説がこれまで多く共有されてきたように思う。しかしながら、社会学者がみていたグローバ

リゼーションの風景も、ある範型に基づいた視角によって見えやすかった部分をみてきたという可能性を否認ない（グローバリゼーションの言説化）。

そこで、部会をもつにあたって、冒頭で司会から以下2点を共通提題として掲げ、これらのいずれかになんらかの応答となるような報告をお願いした。5つの報告はいずれも報告者の調査にもとづいた事例研究であり、これらの報告内容をもとに、各地におけるさまざまな現象面から、グローバリゼーションに関するあらたな記述課題が抽出できるのではないかと考えたからである。

【提題1】

帰属／identityのあり方や生活様式のあり方のなかには、資本や行政のデザインに規定されきれない部分もある。そうしたデザインに乗りつつもしだいに別の帰結を招来するような諸実践のように、これまでの研究では対象化されにくかった地域社会のリアリティがある。それはどんなものか。

【提題2】

流動性の高まりによって生じうる、これまでにみられなかった異なるカテゴリに属する人びとどうしの出会いをどうとらえられるのか。そうした出会いのなかでの（これまでに対象化されにくかった水準での）コンフリクトや協働の例はあるか、そしてそれはどう評価しうるか。

本特集の構成は、つぎのように組まれている。まずは本稿（イントロダクション）に続き、当日の各報告要旨を1ページにまとめていただいたものを掲載した。フル・ペーパーは別の機会にどこかで読んでいただけるだろう。次に、本特集の中心である、これらの報告に対するおふたりのコメントからのコメントと、それに対する各報告者からのリプライのようすを、当日の対話形式のまま採録した。さいごに、これらの討議を受けた総括を掲載している。

野宿者の移動と定住—ストリートの可能性

山北 輝裕

しばしばストリートにおける諸実践は、日常性と分離したパフォーマンスとしてみなされがちである。そしてストリート実践は一過性の「イベント型パフォーマンス」として、生活とはかけ離れたものという印象を与える。あるいは、その連続性をうまく接続することができなかった。ここに、ストリートにおける「おもしろさ」＝欲望の一形態＝祝祭的側面と、生活との連続性／不連続性を見ることが必要になる。この連続性と不連続性に着目することで、結節点としてのストリートにおける、ストリートアクター間の向き合うことの難しさやつながることの難しさを照射することができるだろう。

一方、ストリートに否応無く生活が浸潤するという視点がある。「定住近代家族」を社会の基本的な構成単位として、そこにそぐわない人々を社会から排除する動きと、その「安全地帯」を自己防衛しようとする動きとの間の両極のなかで、ストリートとホームの境界が曖昧化してきているという。すなわち、ここから浮かびあがるストリート像は、一過性で移動的で不安定で流動的な場というものだろう。ここでの「生活としてのストリート」はなにも文字通りストリート（路上）で住むということではなく（野宿者の場合それも含まれるが）、人々がストリートに根付かざるをえないとでもいうべき状態をもさすだろう。ホームがストリート化していくなかで、ホームとストリートの境界がなくなっていくことは、上記のストリート（パフォーマンスにおける）と生活の分離の視点とは真逆である。

現代社会における人々の「定住と移動」の間隙としてのストリート。果たして、「生活としてのストリート」は消えたのか、生活とストリートは分離したままなのか、それとも…。

本報告では、上記の問題関心のもと、野宿者の「移動と定住」について考察する。本報告において、野宿者の「定住」とは野宿のままとどまり続けることを意味する。野宿者の「移動」とは空間的移動や野宿の脱却を意味する。いうまでもなく、そもそも野宿者に「定住」はありえない。なぜなら公共空間への野宿者の「定住」は、空間をめぐる政治において、きわめて困難なものであり、場合によっては強制排除を引き起こす。すなわち、野宿者の「定住」は時限的なものであり、生殺与奪は空間を管理するものにゆだねられ、強制的な移動を誘発するというパラドクスを抱えている。そして「定住」を維持するには、野宿者集団の関係性を調整し、地域との関係性を適切に結ぶなど数々の実践が必要になる。このように、野宿者にとっての「定住」は「不可能」なものである。翻って、野宿者の「移動」はどうか。寝場所の確保・アルミ缶などの収集等、日々の「移動」が存在する。とどまることが許されない野宿者にとって「移動」は生活の中心となる。「移動型」の野宿者は近年増加傾向であり、公園で暮らす「定住型」は減少している。

政策との関係（個人化）ではかられる存在でしかない野宿者が、地域へと根付くこと（しかも今は「移動型」が多い）はいかにして可能になるだろうか。このことについて、当日議論できればと思う。

イギリスの若者ムスリムの社会意識

ー グローバリゼーション、再帰性、アイデンティティ ー

安達 智史

グローバリゼーションの進展は、帰属／identityについて、大きな政治的・社会的問題を引き起こしている。本稿が対象とするイギリスでは、移民・難民、あるいはエスニック・マイノリティの増大を背景として、文化的多様性と社会的結束とを両立させるための政治的試みが活発化している。新労働党を中心に、「ブリティッシュネス (Britishness)」と呼ばれる、民主主義的な価値により定義される、共有すべきアイデンティティ・モデルが提示されている。だが、それは、ムスリムの統合の欠如を批判するものとしてしばしば用いられている。ある意味で、ブリティッシュネスは、イギリスの価値かイスラームの価値かという選択を迫るものとして機能している。

それに対して、報告者がインタビューをおこなった若者ムスリムたちは、そのような考えとは異なったアイデンティティ形成のあり方を示している。彼女／彼らは、「イギリス人であること」と、「ムスリムであること」を調和的にとらえようとしている。そのために、〈宗教／文化〉という区別が導入されている。イギリス社会への参加を阻む、抑圧的な「文化」(アレンジド・マリッジ、女性に対する抑圧など)を、「宗教」としてのイスラームから切り離すことにより、イギリス社会への適応、すなわち、教育、社交、キャリアにおける成功を目指すのである。このことは、インフォーマントが「イギリス人であること」と「ムスリムであること」との間には、先験的なコンフリクトが存在していないと考えていることを表すものである。

むしろ、問題なのは、イギリス人であることとムスリムであることの両立可能性にもかかわらず、いつまでもムスリムを潜在的なテロリストとして扱うことや、テロへの戦争が、ムスリム・コミュニティの疎外感を高め、結果として、イギリスの制度的前提を破壊するような過激な活動へと人々を向かわせているかもしれないということである。求められるのは、若者ムスリムのさらなる「再帰性 (反省)」を高めさせ、イギリスへの同化を推し進めるのではなく、イギリス社会自身の「再帰性」を高めること、すなわち、自身の多様性を理解し、ムスリムを(利害の対立は存在しつつも)社会の正当な一員として承認することにある。

コメンテーター(塩原先生)から提起された「出会い」という論点は、なぜ一部のムスリムは、そのように柔軟なアイデンティティのマネジメントが可能なのか、ということに答えるヒントとなる。その論点を報告者なりに解釈すると、人々の関係は、「出会い方」に大きく左右されるということである。心理学における「接触仮説」が示すように、多様な人々が平等、相補的、あるいは個別的な接触条件において出会うとき、積極的な関係が築かれやすいのである。多くのインフォーマントが通っている／通っていた学校では、地元のコミュニティ団体と協力し、宗教教育やシティズンシップ教育において、多様性を理解し、またその間の協力関係を意識できるような取り組みをおこなっている。そのことは、若者ムスリムが自身および他者の多様性を理解し、その上で関係を築くスキルを高める結果となっている。

移動する人びと／エスニシティの社会をどのように 〈フィールドワーク〉できるのか

— 自己延長的なフィールドワークの試みにむけて —

稲津 秀樹

国境を越えて移動する人びと／エスニシティをテーマとした諸研究は、社会学においても活況を呈している。一方、当該研究のフィールドワーク論が十分に議論されているとは言い難い。ここではそれを次のような問いから始めてみたい。すなわち、グローバル化による「移動と定住」をめぐる問題が生起する「フィールド」は、いったい「どこ」にあるのだろうか。

これについて、日本のエスニシティ、とくに「ニューカマー」関連の事例研究では、都市や地域という空間における、対象のエスニックな「可視性」に基づいた理解がなされてきた。そこでは調査者が「客観的」な立場から対象に接近しつつ、その実、「日本人」という視点に立ち、マジョリティ／マイノリティという二項対立的な境界線を再生産し、対象を一面的に理解していた。こうした「可視性の誤謬」をめぐる問題は、いかにして乗り越えられるのだろうか。

例えば、わたしが日系ペルー人の「監視の経験」（稲津 2010）を考察した過程を振り返れば、ある男性の語りを、「困惑」として受け止めていたことに気付かされる。その上で、当時のノートやWEB上の日記において、わたしは、「彼ら」との間の「分かり合える部分」／「分かり合えない部分」を探ろうとしていた。その過程で、父方の家系が朝鮮半島からの引揚者であるという逸話（自らも「移動する人びと」の子孫であったこと）や、幼少時の「チック症」をめぐる「見られる」体験が彼の語りとは結びつけながら想起されていた。わたしは彼らにとって「日本人」という他者であるが、自らを形成してきた経験を敷衍して語られた内容を振り返ることで、彼らを取り巻く「問題」を構成する独自の社会背景を理解するための回路を開こうとしていたのだった。

ここから提起される「フィールド」は、対象の「可視性」に縛られるのではなく、自己と他者との「関係性」の間で、自分自身が延長されてきた経験を反省的に振り返る過程として理解される。だがそれは、自己と他者の安易な同一視ではない。こうした自己延長的な他者理解の狙いは、都市や地域においてグローバル化のいわば「図」としてあらわれる「可視性」に即した対象理解ではない、職場を共にする経験（五十嵐 2000）や教育支援ボランティア（稲津）といった、いわば、「地」における人びとの日常的な関係性に導かれたリアリティからの「問い」を提出するところにある。こうしたグローバルな人の移動から不可避免的に生起する関係性次元からの「問い」を、人びとの間の日常的な出会いの中から提出することによって、移動と定住のフロンティアを考えていく契機が生まれていくものと考えられる。また、その過程で再編される調査者—被調査者間の権力関係も、慎重に注意を払わねばならない今後の重要な課題だろう。

文献

五十嵐泰正, 2000 「『外人』カテゴリーをめぐる4類型—職場における人種間関係の事例研究から—」『社会学評論』51(1): 54-70.

稲津秀樹, 2010 「日系ペルー人の『監視の経験』のリアリティー〈転移〉する空間の管理者に着目して—」『社会学評論』61(1): 19-36.

ネットコミュニティと地域コミュニティが交差する〈場〉

— 滋賀県犬上郡豊郷町におけるアニメ聖地を事例として —

谷村 要

現代社会における流動性の高まりや電子メディアを介した非対面接触の増加は、都市、さらにはその郊外地域の場所性を変容させつつあるといわれる。本報告では、その一事例として、滋賀県犬上郡豊郷町の「アニメ聖地」におけるまちおこしを取り上げ、ネットコミュニティが郊外地域の場所性の構築に関わっている状況を分析する。

流動化、並びに電子メディアを介したコミュニケーションの相対的な増加は、かつて都市に集中していた消費機能や多様な人びとが集まり交流しあう場が郊外地域や仮想（バーチャル）空間へと広がっていることを意味する。この状況において、地域外の人びとを地域内に呼び込むために、さらには、コミュニティの成員に地域への愛着や誇りを抱かせるためにも各地域は独特の「地域ブランド」を積極的に打ち出す必要に迫られている。このような要請のもとに新しい「まちおこし」として期待されるのが、「アニメ聖地」を用いたまちおこしである。本報告ではその具体的な事例として滋賀県犬上郡豊郷町を取り上げる。

「アニメ聖地」とは、山村（2008）によれば「アニメ作品のロケ地または、その作品・作者に関連する土地で、且つアニメファンによってその価値が認められている場所」とされる。この「アニメ聖地」を用いたまちおこしは、埼玉県久喜市鷲宮地域（旧・埼玉県北葛飾郡鷲宮町）で2007年よりなされており、鷲宮神社の初詣参拝客数の増加や町内の商店へ大きな経済効果を及ぼすなどの成果を得ている。この鷲宮の「成功」を受けて、複数の地域で「アニメ聖地」を契機とした「まちおこし」が試みられているが、本報告で取り上げる豊郷町もそのような「まちおこし」を積極的に進めている地域の一つである。この町において特徴的なのが、「アニメ聖地」となっている豊郷小学校旧校舎群の施設をアニメファンのネットコミュニティが主催するイベント（オフ会）の会場として貸し出している点である。また、「まちおこし」の担い手である「けいおんでまちおこし実行委員会」は彼らのイベントを支援し、ときに町の個人商店の軒先にアニメキャラクターのイラストが表出する景観が作りだされる。

このような現象がなぜ現出しうるのか。

地域コミュニティ側は、独自性のある「地域ブランド」の確立を求めている一方で、ネットコミュニティを通じてつながったアニメファンたちはバーチャルな空間を越えたつながりをつくるための「場」を求めている。“移動”者である地域外のファンと、“定住”者である地域住民—「アニメ聖地」の景観はこの両者の求めるものの上につくりだされているのである。

文献

山村高淑，2008，「アニメ聖地の成立とその展開に関する研究：アニメ作品「らき☆すた」による埼玉県鷲宮町の旅客誘致に関する一考察」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』Vol.7 pp.145-164.

グローバリゼーションのなかでの地元志向現象

轡田 竜蔵

グローバリゼーションによって国境を越える人々の数が増大しているなか、それと相反するかのよう、近年の日本の若者は地元志向（地元就職・地元消費・地元愛）を強めていると言われている。本報告の目的は、この現象に関する理論モデルを検討し、そのうえで、報告者が行ってきた調査結果をもとに検証することである。

本報告は、まず地元志向現象を説明する二つのモデルを検討する。

一つ目に挙げられるのが、「社会的排除」モデルである。このモデルによれば、若者は地元の生活空間に「閉じ込められている」のだ、と見なす。すなわち、ゼロ成長経済のなかで、階層上昇が難しくなるため、雇用や消費の選択肢がより大きいと考えられる地域に移動するリスクをとらず、地方圏に留まり、実家というセーフティネットに依存する傾向が強まったのではないかと捉え方をする。そして、地元繋がりの人間関係は「同質的」かつ「排他的」なものにとどまっているという見方をする。

もう一つ挙げられるのが、「社会的包摂」モデルである。このモデルによれば、若者の地元志向は、高度消費社会や情報社会の発展のおかげで、「地元」は従来よりもずっと暮らしやすい空間になったことの帰結であるという捉え方をする。そして、「地元繋がり」は、競争社会において精神的なメンテナンスをはかっていくうえで、重要な資源となってきたと考える。

「社会的排除」モデルによれば、地元志向の若者は、就業行動においてはリスク回避を重視し、消費行動においても行動半径が狭く、中間集団にしがみついて「安定」を第一に考える、「保守的」な人たちであると見なされる。これに対し、「社会的包摂」モデルによれば、地元志向の若者は、競争主義的な就業行動を嫌い、脱消費主義的なライフスタイルを志向し、ローカルな足元にある資源を見直そうとする考え方を持った、「クリエイティブ」な人たちであるということになる。

報告者は、ある地方私立大学の出身者に対して行った、半構造化インタビューを中心とした調査の結果から、このモデルについて検証した。その結論としては、当事者のリアリティについては、ジョック・ヤングが「過剰包摂」と呼んだような仕組みで、二つのモデルが絡まり合っているということだった。当事者は、決して明るくない自分の将来展望を語りながら、それでも「地元生活」がもたらすささやかな包摂の感覚によって、ぎりぎりのところで自分を支えていることがわかった。そして、報告者は、地元志向の若者の語りの分析に基づき、「社会的包摂モデル」のように「クリエイティブ」なライフスタイルの可能性を展望することは難しいが、「社会的排除モデル」のように、自分の属する中間集団にしがみついている、と言われるほどに「保守的」であるわけでもない、と結論した。